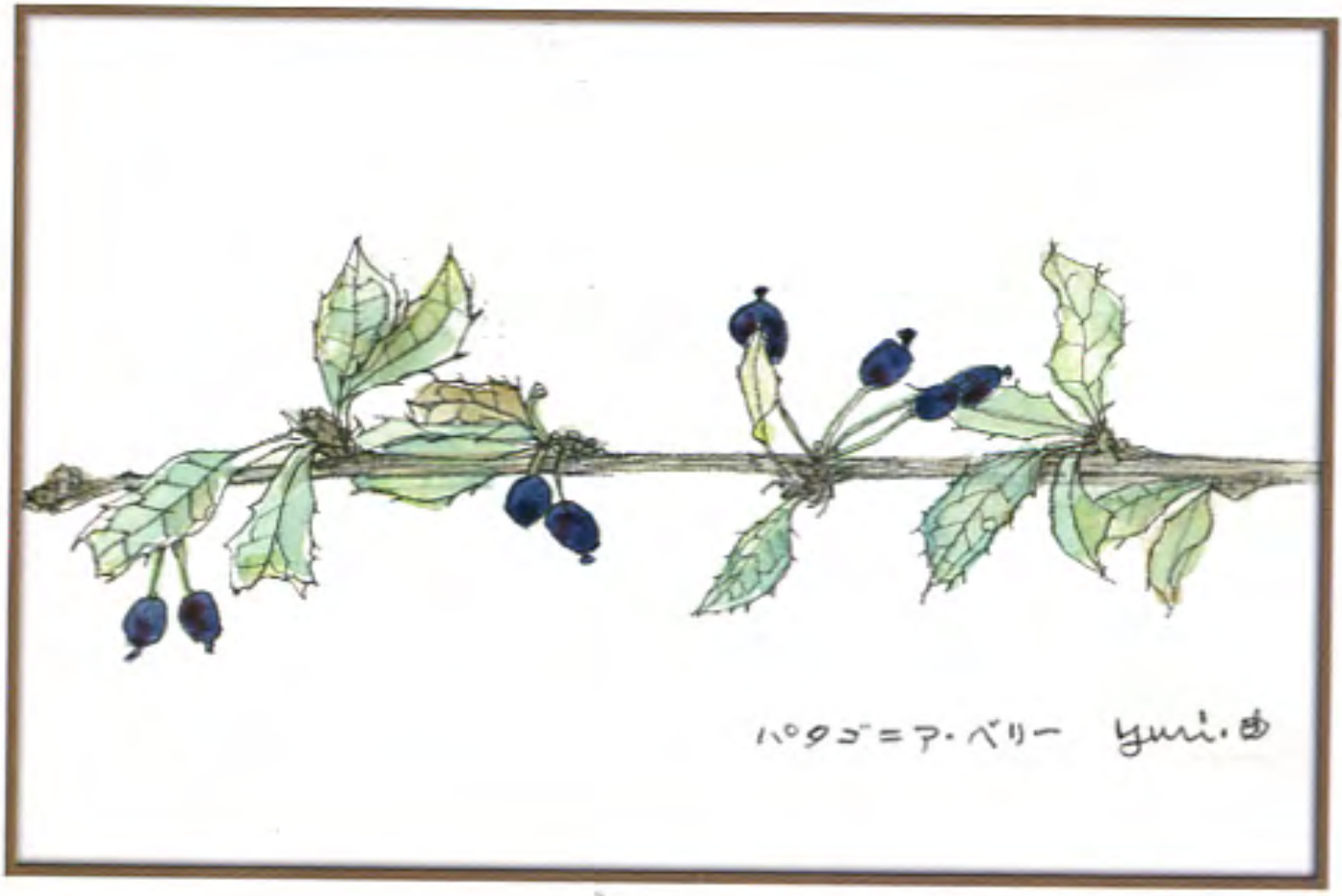
熟年俳句誌

9 2013年 月号

かさね



黒羽集（二十一）

佐藤喜仙

白壁に水かげろふの聖五月

炎昼の空惜しみなき碧さかな

峰雲や乗らなくなりし三輪車

浜名湖の闇に火をさす夜焚船

いつの間に水馬すむ神の池

放課後の妖怪あそび木下闇

還暦の帰省迎ふる山河かな

この日には男かしまし夏祭

身の枷をすこしゆるめて蛍の夜

長髪に決意の鋏半夏かな

黒塗りのリムジン通る暑さかな

蔵の白運河に沈む炎暑かな

かさね集

自選句集

「小さな祭」　松本周二

大幟はためき村の夏祭
御輿ねられ鳳凰空に舞ひ上がり
富士塚へ登頂の人の日傘かな
ここで道終りの山家額の花
漆喰の破れ土蔵や枇杷熟るる
花とべら幼ななじみは海育ち

「氷河」　古川千鶴

崩落の氷河を浮べ夏の海
大型船着岸アラスカ避暑の町
ルピナスやフィヨルドに散る滝しぶき
潮を噴く鯨の海や夏の航
フィヨルドの風に頷く螢袋
あざらしの顔出す小川鮭の街

「釣忍」

川井素山

夏の灯や航跡彩る隅田川
ローカル線窓が切りとる夏の海
縄暖簾軒で雨呼ぶ釣忍
蓮の花割れて水玉葉に踊る
ハイヒール素足で修理待つ婦人
托鉢の僧も逃げ行く炎暑かな

「鰯雲」

安藤虎酔

いつとなく空新しき鰯雲
取り残す甘柿一つ鳥のもの
神の国仏の国もクリスマス
いろり火や遠き思ひ出村の家
囀りや愛を求めて枝移り
参詣の湯島の梅や絵馬多く

「盛夏」

田島昭久

立葵次々咲ひててつぺんに
公園の出口の家の凌霄花
老婦人のピアノの音や夕薄暑
池にはる蜘蛛の巣今朝の露びかり
日盛や植木職人日差し入れ
夏燕庭園を舞ひ人休む

撫子集

主宰選

小池清司

ででむしに教へ乞ひたし夏の庭
庭下駄を仕舞ひ忘れて戻り梅雨
急勾配の車窓をよぎる七変化
語部の佳境に入るや夏座敷
黒猫の木陰をひろふ日の盛り

長久保郁子

わが丈を越えて歩道の立葵
待ち合せ場所までひとり夏つばめ
杜鵑花手入保存会とふ法被着て
入れば出る茅の輪くぐりや嬰を抱き
帰りきてたたむ日傘の熱きこと

岡野安雅

畦道や草いきれする午後三時
外野手がボール探すや草いきれ
市場から帰り二度目の髪洗ふ
大声に汗滴らせフットサル
父の日や華やかさ無き酒を酌む

青木英林

凌霄花思はぬ高みに顔を出し
駒草の優雅に揺れて山険し
浴衣着て下駄を突つかけ縁日へ
今年又どぜう鍋にて元気増す
悠々と熊鷹の舞ふ夏の山

ひまわりが首を傾げる昼下り

幽明を行きつ戻りつ昼寝かな

昼下り冷酒飲んで薄暑かな

はぢらひを浴衣に映す乙女あり

豆飯に思い出の顔いくつある

山本達人

那須野集

主宰選

風鈴の音弱々し路地の軒　後藤克彦

屋形船浴衣の娘慎ましく

炎風や日陰を探す乳母車

朝顔を手に挨拶の親子連れ

名古屋場所幟に豪雨降りやまず

幼な子の浴衣の袖に宝物　森岡陽子

葉先から雨粒ぽとり夏の夕

風かはり簾の向うの雨気配

紫陽花は通せん坊とあふれ咲く

田舎道名前も知らぬ夏の草

群青の朝顔揺るる小雨かな　丸山酔宵子

浴衣着て暖簾くぐればコップ酒

風鈴売り爽やか声やはしご酒

炎熱の陽射し背に受け草むしり

紺碧の空の向かうに雲の峰

鬼蜘蛛の張る糸強し軒の下　池内とほる

歓声のプール包めり夾竹桃

脱皮して斑艶やか山棟蛇

陽に透ける殻の薄さや蝸牛

やや乾き固まりたるや青蛙

十薬のはびこるほどに庭荒れぬ　橋本修平

山荘の窓開け放ち風薫る

薫風に酔ひしるる今至福なり

われ落とし孫拾ひたる杏の実

妻の弾く二胡しんみりと仲夏の夜

鯱の誇らかにあり西日中　小柳千美子

垣越しに飛び来る声や水遊び

古里は降りみ降らずみ花糸瓜

ひもすがら老鶯の声添ひにけり

杣小屋に正午の時報黒揚羽

屋根修理男二人の夏帽子　和田勝信

早乙女の立ち上がりしは老婆かな

夏帯の女船頭声高し

ラジカセの祭囃子や観光船

梅雨晴れやお宮参りの赤衣

ほろ酔ひに足元暗し蛍狩　柳田皓一

あちら平家こちら源氏の蛍火かな

神秘とは点る蛍の光かな

ひとすじの蛍火流れ深き闇

蛍火の点る時間を測りけり

梅雨晴に山車曳く声の勢みあり　田中清秀

紅さしてべそかきながら神輿追ふ

泣き止めるおでこの面や夏祭

天めざし蔓巻き伸ぶる金葎

竿で打つも高きに残る実梅かな

梅雨晴間公園にひびく子らの声　吉田博行

梅雨晴れや雲の切れ目に月光る

梅雨寒や人肌恋ふるひとり酒

古都の路そぞろ歩きの浴衣がけ

艶やかに浴衣がけして散歩かな

子らの指す池の向かうに蛍かな

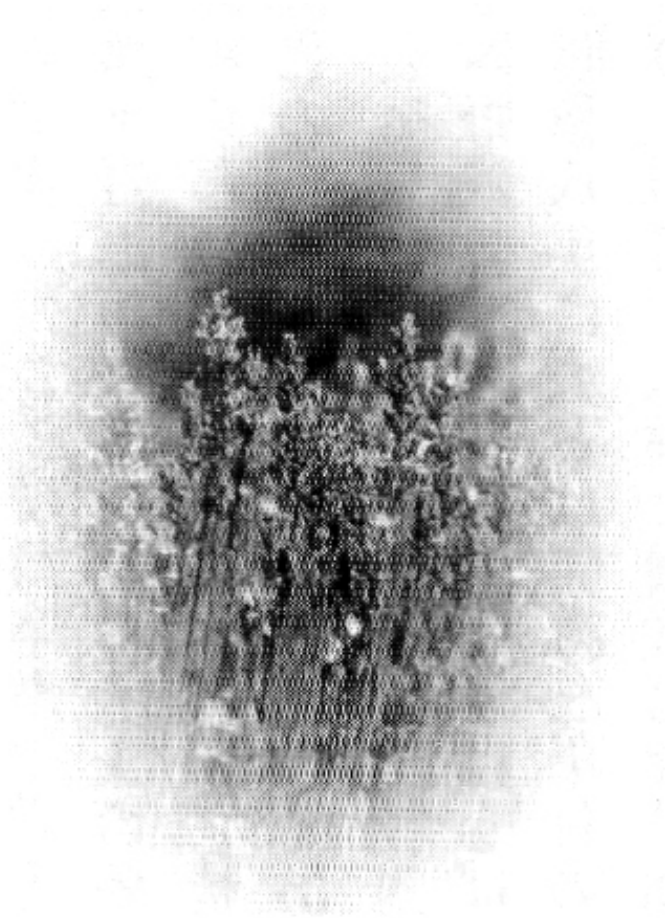
あぢさゐに埋もれたりけり駐車場

七夕の願ひ今年は長寿とす

夏の月老人と犬の影歩く

古里に見馴れし夏富士世界遺産

長島清山



撫子集・那須野集鑑賞七月号より

客員　村上克哉

撫子集

新緑やけやき並木は空狭め　　長久保郁子

欅は武蔵野の農家の屋敷森の代表的な樹木で武蔵野一帯に多く見られ、街道筋の並木は見事なものが多い。府中駅から大国魂神社鳥居に至る馬場大門の並木は幹回り3メートルに及ぶ巨木が並び、大通りを覆う若葉が萌えたつ新緑は目覚めるようで空を一層狭めて、夏の到来を告げる新鮮さを感じさわやかである。

いつまでも動かざる亀藤揺るる　　米田文彦

亀は寿命万年とも言い縁起のせいか、善光寺、成田山などの名刹の池や庭園、公園の池に見られ親しみが深い。亀戸天神社は広重の名所江戸百景にも描かれ、花の天神様とも言われ境内の太鼓橋の岸にある藤は房も長く見事である。池の中の岩の上では亀が折り重なる様に甲羅乾しをして、身動きもしない。春風に揺れている春の名残の花房の長いノダフジと亀の取り合わせが妙。

麦の穂のうねりとなりてバスを呑む　　小池清司

秋に種を蒔いた麦は冬の寒気に耐えて4月半ばに青々とした穂を出し、6月になると熟れきって黄褐色の麦畑が広がる。気候も安定して作物が成長し始める新緑の中に黄金色の麦畑は鮮烈である。薄緑の穂より際立って見える、折からの風に乾いた音をたてうねる穂波の中に街道を走るバスも呑まれてしまった。麦秋の景。

朝凪に光あふるる春の海　　山本達人

春の海は風も弱く波も静まり、海の魚は動きも活発となり、北の海も八十八夜頃から春の海となる。のんびりとした明るい穏やかな海である。凪の海に朝日がきらきらと輝く実景であろう。朝凪は俳句大歳時記によると「夏の晴れた日の朝、陸風から海風に入れ替わる時の無風の状態が朝凪である」とある。今年は春の気温が高く朝凪の現象が多かったと思われる、春の海が主要な季語で朝凪は補足で感動が分散することはない。（以下略）

伝言板

1 第二十一回本部句会（原則第二金曜日）

①日時　２０１３年９月13日（金）
14：00～17：00
②場所　目黒区「下目黒住区センター」
３階会議室
③投句　当季雑詠　５句
④会費　１０００円

2 第二十二回本部句会

①日時　２０１３年10月13日（金）
14：00～17：00
その他事項は第二十一回に同じ

3 第二十一回吟行（原則第四火曜日）

日時　２０１３年９月24日（火）
場所　佃島界わい
交通　有楽町線・都営大江戸線月島下車
集合　都営大江戸線月島駅改札出口　11時
句会場　未定
昼食　月島の「もんじゃ焼き」
出句数　嘱目３句
費用　交通費・昼食代各自負担。
会場費均等割り
申込　喜仙宛９月20日まで
（ＦＡＸ又はＴＥＬ）

4 第二十二回吟行

日時　２０１３年10月22日（火）
場所　向島百花園
交通　東武伊勢崎線東向島下車徒歩８分
集合　東向島駅改札出口　11時
句会場　園内「御成座敷」
昼食　各自用意
出句数　嘱目３句
費用　交通費・昼食代各自負担。
会場費均等割り
詳細は次号にて。

5「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」欄がございますので、句評、近況報告、ご意見などご自由にお寄せください。

なお友の会の皆さんは特別作品（十句）、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。
年会費　１２０００円（前納）
ただし年次途中入会者は入会申し出の翌月より12月まで月割りで納付
見本誌　４００円（切手可）
見本誌請求先
１５２－００３３
東京都目黒区大岡山２－７－５
かさね俳句会　佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

一、俳句は世界最短の「詩」である。
二、有季・定型・文語体を旨とする。

Ⅰ 前提

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①
「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②
「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を『表季語』と称する」

原則③
「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

原則④
「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤
「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

③ 文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

Ⅱ 俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。
現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現
主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞
地名・固有名詞は一句の中にあって季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切
形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。
例　完全な三段切　奈良七重七堂伽藍八重桜　芭蕉
　　三段切でも可　初蝶来何色と問ふ黄と答ふ　虚子

五、前書・ルビ
前書は慶弔の句にのみゆるされる。
ルビは誌中では使用しない。

Ⅲ 俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。